

## 協働実践する教師コミュニティの創造を目指して

平良 善信

### I. はじめに

令和 2 年度福井大学連合教職大学院・宮古島市教育委員会の連携協定締結に伴い、福島教授よりお声掛けいただき、コーディネーターチャーとして勤めることになった。4 月からスタートした東京サテライト校におけるコーディネーターチャーの業務は、不慣れで戸惑うことが多々あるものの、それが逆に自分自身の殻を破る好機になっている。1 年にも満たない勤務期間にもかかわらず、これまでの実践を省察する必要性を痛感する 2 つの場面があった。

1 つ目の場面は、宮古島市立 K 小学校の総合的な学習の時間を参観した時であった。K 小学校は、福島教授の支援を得ながら「海プロジェクト研究」を推進している。本研究は、海と人との関わりを探究するため、学祭的カリキュラムの開発を目的にしている。科学的なアプローチ「事実としての海」と、人文・科学的アプローチによる「意味としての海」の双方を考察し、その双方の視点から、これからの時代に必要な「海洋と人類の共生」の主体的な探究を促す豊かな授業づくりを目指している。子供達は、追い込み漁体験学習など、地元の漁師の皆さんの協力を得ながら本物に触れる体験を通して、探究学習を行っている。また、本研究は、教師志望者の育成も兼ねており、大学生も加わり子供達の学びを支援している。

9 月に子供達の漁師らへのインタビュー活動を支援するため来校した一人の大学生が、子供達の活動の様子を見て、次のことをつぶやいた。

「K 小学校の児童は、問いを持つことが苦手かなあ？」  
学生の何気なく発した言葉であるが、宮古島の教師の学

習指導に関する弱点を指摘されたように感じた。沖縄県教育委員会（教育事務所）に所属し、学力向上対策をはじめ教職員の資質向上に係る業務に従事したこともあり、大学生のことは重くのしかかり、思わず次のことを自問自答した。

「本プロジェクトのように、子供達の探究学習を支援できる教員は、宮古島に十分いるのだろうか」

「どれぐらいの学校が、知識・技能の定着を重視した教師主導型の授業から脱し、児童生徒の問いが生まれるよう授業の工夫改善を図っているのだろうか」

『授業改善モデル』は、これまで沖縄県教育委員会の学力向上施策に基づき、学校現場に下ろされてきたが、各学校は、このことをどのように受け止め、授業改善を推進してきたのだろうか」

2 つ目の場面は、令和 3 年度宮古地区理科観察・実験指導に関する研究協議会において、学力調査官 小倉恭彦氏の指導助言を拝聴した時である。調査官は、「主体的・対話的で深い学びを目指した指導と評価」と題し講話した。調査官は、学習指導をカレー作りに喩えて、「カレーづくりを正確に行わせること」を目標においた授業と「生徒が主体的にカレー作りに取り組み、協力して美味しいカレーを作ることで、対話を通して良さを味わうことができる」に目標をおいた授業を例にあげ、指導者が設定する「目標」で学びの深さが違うことを強調した。調査官が述べられたことは、宮古島市全体で取り組まなければならない指導方法改善の課題であるのにもかかわらず、積極的に取り組まれていない現状を伝えると、次の助言があった。

『点数を取らせる授業』『知識を詰め込む教師指導型の授業』では、子供達に 10 のことを教えても、時間が過ぎれば

ば子供達はその内容を忘れ、残るのはわずかである。変化の激しい予測困難な時代を生きる子供達のためには、授業で学んだ10のことが、将来において15にも20にもなるような授業にしなければならない」

「このことを可能にするのが、協働探求の授業である。まずは、このことについて全教員が共通理解を図らなければならない。今、教師に求められることは協働探究の授業に挑戦することである。とにかくやってみる教師集団をつくることが重要である」

調査官の助言を拝聴し、「では、調査官が提唱する協働実践する教師コミュニティを宮古島で実際に創造していくには、まず何をすればよいのだろうか」と、新たな問いが生まれた。

その後、2つの場面で生じた問いが頭から離れず思索する中で、まずは、自分自身の実践を省察する必要性を強く感じた。

そこで、校長として勤務した宮古島市立久松中学校における実践を省察するとともに、所長として勤務した沖縄県宮古教育事務所における取組を考察する。さらに、宮古島にとって大きな教育リソースとしての福井大学教職大学院をどのように活用すれば、2つの場面で生まれた問いを解決し、宮古島の教育振興・発展につなげていくことができるか探っていく。

## II. 沖縄県の学力向上対策の現状と考察

### 1. 学力向上対策の現状

沖縄は、終戦後すぐにアメリカの占領統治下に置かれ、アメリカ的な教育の側面を織り込みながら、日本本土との相対的な独自の歩みをしてきた。ところが1969年に日本復帰が決まり、1972年の日本復帰によって日本本土の教育と同じ歩みが要求された。財政的支援によって学校施設・設備は全国水準に近づいたが、他方で、これまで国費学生制度・米国留学制度によって沖縄県内の抜粋で大学進学できたのが、急に全国の学生と対等に競争することになった。そのため、学力の低さが自覚され、学力向上を希求する意識が高まり、そこから学力問題が浮上してきた（琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 藤原幸男）。このような歴史的背景から、沖縄においては「本土並の学力」を希求する声が高く、沖縄県教育委員会も「沖縄の子供たちの学力を本土並みの学力水準へ」を目標に学力向上を展開してきた。沖縄県教育委員会は、1988年から「学力向上」を実施し、対策の基本方針の第1に「基礎学力の定着」「確かな学力の定着」を掲げ、県内のすべての小中学校において学力向上対策を推進し、その成果

を県独自の「達成度テスト」で検証してきた。しかし、2007年度文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」における最下位の結果は、これまで進めてきた学力向上対策に疑問を呈した。

この結果を受け、沖縄県教育委員会は、「わかる授業の実践」を前面に出し、さらにキャリア教育の展開との絡みで学力向上対策に取り組んできた。平成29年度から令和1年の期間において、学力向上推進施策「プロジェクト」を新たに打ち出し、「他者と関わりながら、課題解決に向かい『問い』が生まれる授業」を目指す授業像を示し、新たな時代へ対応する視点をもった授業改善に取り組んできた。総括目標を、「沖縄県の児童生徒の学力を全国水準に高め、維持する」とし、成果指標を「全国学力学習状況調査を指標とし検証する」として取り組まれた。この総括目標や成果指標から垣間見えることは、平成19年度から平成25年度にわたって「全国学力学習状況調査全国最下位」から脱したいという県教委の強い思いである。この期間において、学力向上に係る取り組みの徹底がこれまで以上に図られ、2014年には、小学校が24位へと躍進し、現在、全国平均点を維持するようになった。しかし、中学校は、依然として全国最下位にとどまっている。

沖縄県は、この学力に係る課題に加え、進学率・就学率の低さ、若年失業率の高さ、ニート・フリーター、非正規雇用の高さ、完全失業率の高さ、不登校・引きこもりなど課題が山積している。その要因は多種・多様で複合的で、早期解決が望まれている。

琉球大学 島袋教授は、こうした問題を目標育成の問題として捉え、次の3点を明らかにすることを目的に、2019年に県内の小中高生約3,000名を対象に「沖縄県の児童生徒の学習と将来展望に関する調査」を行った。

- ① 沖縄県の児童生徒の学業と進路達成における主体的・能動的である目標志向性の特徴と問題を明らかにする。
- ② 主体的・能動的な学びが小・中・高を通してどのような発達的变化を示すのかを明らかにし、各段階における教育の問題を捉え、教育的改善を図る。
- ③ 沖縄県の児童生徒の主体的・能動的な学習が、進路意識の指標である「進学水準」「将来の希望職業」の明確につながっているかを明らかにする。

以下、調査結果を引用する。

＜調査結果分析の抜粋＞

進路意識の発達では、進路目標を達成できるという自信は見られたもののその手段は未分化であり、具体的な進路活動や学習活動につながっていないことを示唆する

結果となった。また、将来の進学・職業目的も幾分曖昧さ見受けられた。進路CAMIの得点は高校生においては高く、中学生において最も低いという結果にあった。

学習領域については、「統制感・努力の保有感と教師の援助保有感」がまとまっており、学習領域での主体的・能動的な学びをしている児童生徒が以前に比較し、増加していくことを示唆している。そのような学びは、「授業での学び」「家庭での学びの高さ」「それを意味づける他者・教師・親あるいは友人という支持的な人間関係の高さ」が要因になっているという結果にあった。

「能力と運の保有感」で学習を捉える児童生徒の存在も確認された。その要因は学習活動と進路意識のつながりが弱いという結果にあった。

主体的・能動的な学びにつながる「統制感と努力と教師の援助保有感」の得点は、中学校と高校で大きく低下していた。それと同時に授業での学び、家庭での学びと学習の内面化の得点とそれを支えている意味ある他者・教師の得点も低下していた。学習の主体性・能動性に大きな段差が見られた。以上の結果から、第1に中学校・高校において授業改善が強く求められる。

第2にキャリア教育・進路指導においては、どちらかと言うと進路の目標の形成に力点が置かれる傾向にあることが予測される。学習面と同様に進路達成における動力と教師（キャリア教育・進路指導計画）の保有感を育成し、児童生徒の進路活動を高める必要性を本調査は示している。具体的には、児童生徒が自らの進路の計画を作成し、進路選択・決定は自分で決めるという自律性を育てることが肝要である。その結果として学習と同様の進路達成への「統制感・努力と教師の援助の保有感」という目標志向性が育つと言える。

### 1) 現行の学力向上対策

本調査結果を受け、現在、沖縄県においては、新学力向上対策「学力向上プロジェクトII」と「キャリア教育基本の方針」を推進している。

#### a. 「学力向上プロジェクトII」の概要

○総括目標：

「幼児児童生徒一人一人に生きる力の基礎となる新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む」

○長期目標：

「持続可能な社会の創り手となる幼児児童生徒を育てる」

○推進の方向性（3つの視点と5つの方策）

・学力向上推進の重要な3つの視点：

ア「自己肯定感の高まり」

イ「学び・育ちの実感」

ウ「組織的な関わり」

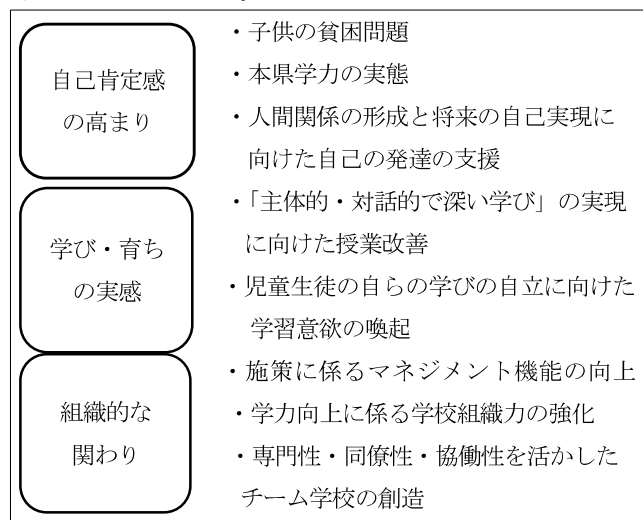
・「学びの質を高める授業 改善・学校改善」を図る5つの方策

ア【質的授業改善】イ【組織的共通実践】

ウ【発達の支援】エ【組織的マネジメント】

オ【学校連携・地域連携】

3つの視点を設けた背景には、沖縄県の学校教育の課題があり、その課題の解決を図っていきたいという県教委の強い思いがある。



### 2) キャリア教育の視点

今回の調査で明らかになった目標志向性（「目標を持ち必要な行動・努力を積み重ねることができるか」）を育成するため、下記の3つの視点にキャリア教育の充実を図る。

#### a. 小中高のつながりを意識したキャリア教育

小中高の児童生徒が12年間を通して、「目的意識」を継続する必要がある。そのために、児童生徒が「キャリア・パスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりしながら、自分自身の学びをつなげていくようにする。

#### b. 「教師主導型」の授業からの脱却

教師主導型の知識を伝達する授業から児童生徒が主体的に学ぶ授業へと転換する必要がある。特に中高においては、調査結果からも課題が挙がっており、さらに意識して取り組むことが重要である。

#### c. 目標達成に向けて行動する力

児童生徒が主体的に学ぶ授業を通し「学び方」を育成し、自律的な家庭学習へつなげる必要がある。また、部活動や習い事等においても「なりたい自分」を目指して、具体的にやるべきことを計画して行動に移す力を高めていく。

## 2. 沖縄県学力向上対策の考察

沖縄県の学力向上対策は、県民の強い願いである「沖縄の子供たちの学力を本土並みの学力水準へ」を受け、長年にわたって展開されてきた。その思いもむなし、平成19年度第1回全国学習状況調査から6年間にわたって全国最下位という結果は、県民にとって衝撃的な結果であり、また、県教委にとっては、これまで行ってきた学力向上の方向性や妥当性を疑わざるを得ない結果となった。その後、学力対策は刷新されたが、「全国最下位の呪縛」からの解放を目指し、行われたことは事実である。全国学習状況調査の元来の目的は、「義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てること」であるが、その目的が沖縄県において薄れてきたのは否めない。そのため、授業改善の目的が、全国学力テストの成績を上げることになっていないかと批判も多くある。また、「沖縄県の教育は、目先の“目に見える成果”にばかり捕らわれ、大切なことを忘れてのでは」と、警鐘を鳴らす教育研究者もいる。

こうした声を払拭する上でも、島袋教授が示唆する「目標志向性」を育成することを前面に打ち出し、中学校・高校の授業を変えることが急務とされているが、本当にそれだけでよいのだろうか疑問が残る。小学校の学びの成果が、中・高校につながらない要因について、もう少し掘り下げ、児童生徒の学習意欲の発達についても考える必要性を感じる。私自身の仮説であるが、「本県の小中学校においては、学習意欲の内発的動機付けが十分におこなわれていないため、子供達の自律学習の基礎を培うことができていない状況がある。特に、中高校と校種が変わるにつれ、教師の『外発的動機づけ』がさらに強くなり、結果として、沖縄県全体で自律的に学習できる子供達をはぐくむことができていない。そのことが全国学習状況調査の結果として表出している」と考える。

今後の学力向上対策や子供達の学習意欲の発達について考える際、ノーベル賞を受賞した物理学者 益川敏英氏が著書「フラフラのすすめ」の中で述べていることが、参考になる。

以下、益川引氏のことばを引用する。

<前略>

みなさんは、このような変化の激しい社会に暮らし、これからさらに変化しつづけていく時代を生きていかねばなりません。ではこういう変化の激変の時代を生きていくには何が必要となってくるのでしょうか？それは、今後、20年先、30年先を見通せるだけの視野の広さと、多様に変化していく社会に対応できる基礎的な知識を身につけることだと、ぼくは考えます。

<中略>

ぼくは学ぶことは大好きです。ただし、人から強制される勉強は大嫌い。だいたい、「勉強」という言葉は、「強い」と文字が入っているのが気に入りません。先生や親に尻をたたかれイヤイヤやらされたり、人の顔色を気にしながらする勉強が、楽しいはずはありません。それに対して、日本語の「勉強」にあたる英語の「study」にこそ、本来の学ぶことの意味が込められていると思います。自分の知らないこと、知りたいことが理解できるようになるというのは、とても楽しいことだからです。<中略>

複雑な国際社会の中で日本はどういう立場におかれているのか、平和な方向に向かっているのか、逆の方向に進んでいるのか、少しでもいいから、世の中の動きに関心をもって欲しいです。

日本が進んでいく方向に賛成するのも反対するのも、それは自由です。ただ、何も考えず、意見も持たず、行動もせず、ただなんとなく生きていく人間にはなってほしくありません。自分の意見をはっきり言えるように、世の中の動きを理解する基礎力も、いまのうちからぜひ身につけてほしいのです。

これからの沖縄県の教育の振興・発展及び学力向上対策の方向性をどうするかを考えるにつけ、益川敏英氏のことばが常に頭をよぎる。

沖縄県は、今後、数字に惑わされるのではなく、益川氏が提唱する「study (本来の学ぶことの意味)」をすべての授業において実現していくことが、今、最も求められていることではなかろうか。20年先、30年先を見通せる幅広い視野や多様に変化していく社会に対応できる基礎的な知識・技能を子供達に培わせることが、教師の使命であるとすれば、課せられた責任は大きい。

### 3 学力向上に係る校長時代(平成26年度～平成29年度)の実践の省察

#### 1) 学校経営について

変化の激しい社会を生き抜く力を生徒に身につけ

せるには、教師が一枚岩になり生徒一人ひとりに質の高い教育を実現することが重要である。このことを実現するためには、校内の指導体制を整えるとともに、教職員一人ひとりが使命感に溢れ高い倫理感に立ち、指導力を発揮することが望まれる。そこで、学校長として、質の高い教育の実現に係る学校課題を明確にし、その解決に向け学校長のビジョンを示し、その力が最大限に発揮できるよう職員のベクトルを揃え、マネジメントしてきた。さらに、「学校長は、教育の最大の環境は教員であり、学校の教育活動の要は教員である」ということを深く自覚し、教職員一人ひとりに専門職としての自覚を促すとともに、指導力の向上に向け学校全体で意識が高まっていくようシステムを構築し、学校経営に取り組んできた。

## 2) 学力向上に係る学校長の考え

「馬を水辺に連れていくことができても水を飲ませることはできない。馬が、水を自ら飲みたいと思えるようにすることが大切である」

学力向上を推進する上で、このことを常に大切に、全職員で「学ぶ意欲に溢れ、自ら問いを発しながら対話を通して深く学ぶ生徒の育成」を目標にして、学力向上に取り組んできた。校長として職員に強調してきたことは、「学力向上は、理想とする子供像（目標）を達成しようと授業改善を積み重ねていくことが重要であり、決して全国学力学習状況調査の数値を上げることが目標ではない。日々の授業改善を通して授業が変われば、その結果として数字として表れてくる」であった。

そこで、教職員が、日々の授業研究に同じベクトルで取り組めるよう、以下の「目指す授業の構想」と「協働実践事項」を設定し、学力向上を推進した。

### a. 「目指す授業の構想」の明確化

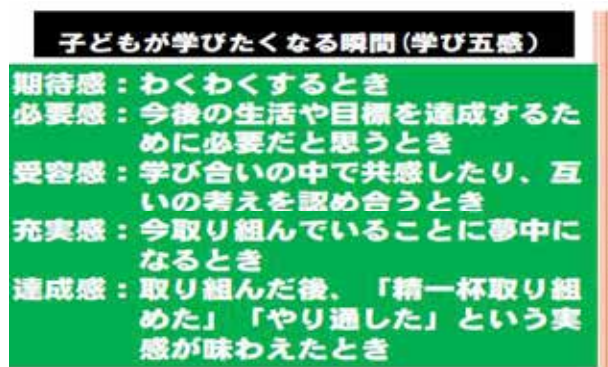
#### ① 自ら学ぶ意欲を高める授業づくりの構想

授業中、自ら意欲的に学んでいる生徒を観察すると、図1のように、これから学ぶことに対する「必要感」や「期待感」に溢れている。また、彼らの意欲は、友達との対話の中で、自己の意見や考えについて、相手に共感・承認されたときに生じる感覚（「受容感」）を味わうことで、学ぶ意欲は一層高まっていく。さらに、問題解決の過程の場面で、解決に向け没頭したときに感じる「充実感」や、やりとげたときの「達成感」を味わったとき、学ぶ意欲はさらに高まっていく。

そこで、主体的に学ぶ生徒の育成を目指し、授業の過程において、これらの5つの生徒の学ぶ意欲（学びの五感）

が高まる場面（瞬間）を意識し、授業実践を行う。

<図1>



<N 教諭の「主体的に学ぶ意欲」を高める指導の事例>

N 教諭は、教科書で教科書を教えるのではなく、教科書を資料として、「数学の楽しさ」「数学で考えることの楽しさ」を味わわせたいという思いを常に持ち、下記の教材研究のポイントを意識し、授業づくりを行っている。

生徒がやる気を感じる時	やる気を引き出す教材
やりたいもの出会ったとき	教材（課題）が生徒の興味に合ったとき
やりがいのあるものに出会ったとき	生徒にとって目標や効果が見えるとき
やり慣れているものに出会ったとき	教材（課題）の解決や操作が今までの経験や既習事項を生かす場面があるとき

○ 課題が生徒にとって切実な課題になるよう課題設定を工夫した例

<工夫した設問の事例>



2年前に買った文房具のレシートが出てきたが、一部が破れているためボールペンと鉛筆を何本買ったのか思い出せない。思い出せるのは、鉛筆をボールペンより2本多く買ったということだけである。

この状況を分かりやすく説明し、課題が生徒にとって切実な課題として感じられるようにする。→課題が生徒にとって主体的な学びを引き出す『問い』になる。

「どうしたら、鉛筆とボールの本数をもとめることができるだろうか。あなたならどうする」と発問しながら、方程式を使って解くことを促す。

② 思考力・判断力・表現力を高める授業づくりの構想  
 思考力・判断力・表現力を高めるためには、知識・技能をただ単に教え込むのではなく、授業の随所において生徒の多様な考えや問いが生まれるよう授業を行うことが必要である。そのためには、教師は、日々、生徒に問いが生まれるよう発問の仕方を工夫するとともに、生徒が主体的に問いを持ち、他者と対話しながら、問い（課題）の解決に向けて、互いに学び合う場面等を意識的に授業に組み込んでいくことが大切である。

そこで、全教科において「問い」が生まれる授業を展開するため、授業づくりの構想1（図2）と発問の工夫のポイント（表1）を意識して、授業実践を行う。

<図2>



<表1>

過程	発問の工夫ポイント
導入 対話1	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師との対話で、これから学習する内容に対し、期待感、必要感が高まるように発問を工夫する。</li> <li>「問い」が生まれる課題を設定する。</li> </ul>
展開 対話2	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己との対話で、「問い（課題）」の解決に向け、自己の意見や考えが持てるように発問を工夫する</li> </ul>
対話3	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者との対話で、「問い」の解決に向け、多角的・多面的に思考・吟味するように発問を工夫する</li> </ul>

まとめ 対話2	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己との対話で、自己の学びの振り返りを通して、新たな発見や問いに気づくように発問を工夫する。</li> </ul>
------------	--

<0教諭の思考力を高める発問の工夫事例>

0教諭は、理科の授業において、生徒の思考を高めるため、下記のことを視点に発問を工夫している。

<実際の発問と生徒の反応の事例>

① 生徒の思考活動を誘発する発問

0教諭：「私たちの生活は、電気なしには考えられない。電気からどのような恩恵を受けていますか。例をあげてください」

生徒A：「ゲームができるし、夜でもライトがあるので、漫画が読める」

② 生徒を具体的に思考させる発問

0教諭：「私たちの身近な電気に静電気がありますが、静電気はどんなときに、発生しますか。日常生活で静電気が発生している例をあげてください」

生徒C：「下敷きで髪の毛を擦った時、静電気が発生して髪がパーツと立ちます」

生徒D：「冬の乾燥したとき、ドアを触ろうとしたら、‘パチッ’という音がし、静電気が発生します。」

③ 生徒の思考を発展させる発問

0先生：「私たちの生活に大きな影響及ぼす静電気の例はありますか。その例をあげて、なぜ静電気が発生しているか考えてください」

生徒E：「雷があります。雷は、雲から発生します。雲は水蒸気と氷でできていて、たぶん雲の中の氷がぶつかり合ったときに静電気ができ、これが雷となるのかと思います」

④ 生徒に思考方法を身につけさせる発問

0先生：「ポリエチレンのひもと棒をそれぞれ擦って合わせると、ひもが浮きました。『なぜ、ひもが浮いたのか』、実験結果を基に考察して下さい」

生徒F：「『なぜ、ひもが浮いたのか』を実験結果から考察します。まず、棒とひもを擦った時、静電気が発生したと考えます。その時、ひもと棒で発生した静電気が同じ性質だったので、しりぞけ合ったため、浮いたと考察しました。」

<H教諭の多角的・多面的に思考させる指導の工夫>

H教諭は、応用問題を活用し、生徒が友達と対話しながら課題に没頭し、他面的・多角的に思考するよう指導を工夫している。

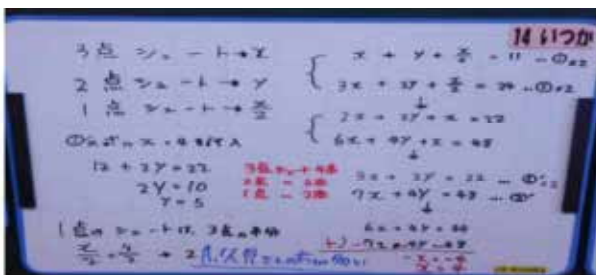
<応用問題を活用した指導の工夫の事例>

日常生活や事象から条件を読み取る力(数学的思考力)とその条件を数学的な見方にとらえ、式として表現する力(数学的表現力)をはぐくむことを目標に、わかりそうでわからない応用問題(高校1年生の内容『連立3元1次方程式』)を生徒に与えた。生徒達は、さまざま角度から条件を読み取り、式として表現していた。

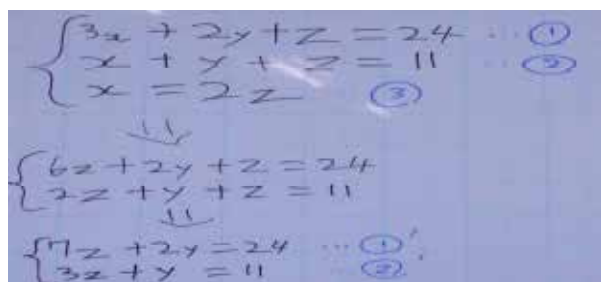
H教諭は、下記のホワイトボードに書かれた違ったパターンの解答方法を用いて、生徒間で「問い」が広がり、思考が深まるように、発問を工夫した。

- 「友達は、どのように (how) 考えているか」
- 「友達なぜ(why)そう考えているか」
- 「友達の解き方は、本当にそれでいいか(true or not)」
- 「友達の考えは何(what)がいいのか」

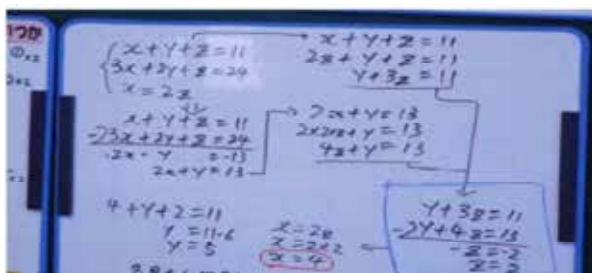
<連立2元1次方程式で考えた生徒>



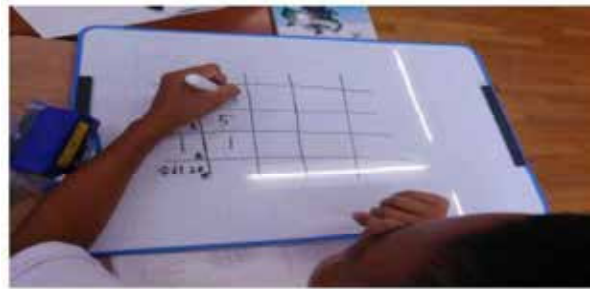
<連立3元1次方程式で考えた生徒>



<消去法で考えた生徒>



<表で考えた生徒>



b. 「協働実践事項」の設定

全職員が授業改善研究に当事者意識を持ち、協働実践していくには、具体的に何に取り組むのかが示されていることが重要である。そこで、全職員が授業研究に協働的に取り組めるように、協働実践事項を2つ示した。

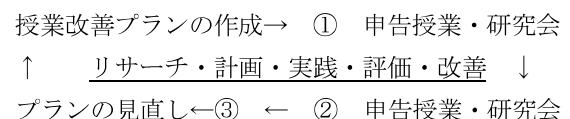
【協働実践事項1】

授業改善ツールを活用した授業改善

全職員が同じ視点で授業づくりができるようオリジナルの授業改善ツール(プランシート)を活用し、授業研究に協働的に取り組む。

<「プランシート」を活用した授業づくりの手順>

- ア 「本時で身につけさせたい力(学習指導要領)」を明確にし、本時の「ねらい」を設定する。
- イ 評価規準の観点と「概ね満足できる状況」を明確にする。
- ウ 評価規準をもとに、評価方法(場面と方法)を意識する。
- エ 本時の「ねらい」から発問を工夫する。
- オ 「ユニバーサルデザイン」の視点に立ち、生徒の思考過程がわかる構造的な板書を工夫するとともに、ICT 機器を効果的に活用する。
- カ 授業終了後、めあてが達成できたかを生徒の振り返りを基に分析し、授業改善につなげる。



＜授業改善プランシート 数学科事例＞

GSR プランシート		期	日	時
<p>第2学年 2/A 第11校時 2/B 第11校時</p> <p>本時のねらいと「めあて」 (身につけさせたい力と評価の整合性)</p>		<p>単元名: 第2章 連立方程式(第2節) 連立方程式の利用</p> <p>13 時間計画の(13) 時間目</p>		
① 本時で身につけさせたい力(学習指導要領)	② 本時のねらい	③ 本時のめあて(生徒側)	④ 本時の工夫	
⑤ 評価方法	⑥ 評価方法	⑦ どのようめあて(振り返りを行うのか)	⑧ 評価方法	
⑨ 振り返り	⑩ 振り返り	⑪ 振り返り	⑫ 振り返り	
<p>めあて: 文字が3つの連立方程式を解くにはどうしたらよいか</p> <p>課題: 決めた3つの本数はどちらが多い? バスケットボールの試合で、下場さんは3本のシュートを決め、中場さんは2本のシュートを決め、上場さんは1本のシュートを決めた。この試合で、観客の人数は、3のシュート、2のシュート、1本のシュートを合わせて11人決り、4観客を合わせた。決めた人数の合計は、バスケットを決めた人数の合計より、下場さん、中場さん、どちらが多いかシュートを決めた、よいか?</p> <p>下場さんのシュートの本数を求めてみよう (自分の考え) 中場さん: <math>3x + 2y + z = 11</math> 上場さん: <math>x + 2y + z = 4</math> 人数の合計: <math>x + y + z = 14</math></p>		<p>振り返り(課題)</p> <p>OOOが3つのシュートを決めた めあて: 文字が3つの連立方程式は、1つの文字を消し、2つの文字の連立方程式を解いて解くことができる Challenge問題 3本のシュートを決めた人数をそれぞれ <math>x, y, z</math> とすると、 <math>3x + 2y + z = 11</math> <math>x + 2y + z = 4</math> <math>x + y + z = 14</math></p>		
<p>まとめ</p>		<p>振り返りの振り返り(課題)</p>		



3) 指導力向上に係る学校長の取り組み

a. OJT を通した教職員の資質・能力の向上

OJT を通して教職員の資質・技能の向上を図るには、職員一人ひとりが、自己の職務上の目標と学校経営目標とのつながりを意識し、実践していくことが大事である。また、その達成に向け主体的に取り組み、その成果を適切に自己評価し、自己の資質・能力の向上につなげていくことが重要である。一方、管理職は、職員一人ひとりの達成状況を把握するため、日々授業観察を実施し、適切適宜に指導することが求められる。そこで、授業参観をルーティン化し、個々の教諭の成長、努力点、改善点を取り上げて、週案や「授業の一コマ」を通して称賛し、職員の指導方法改善に対する意欲付けを図る。また、ミニ授業研究会において指導助言を行い、教職員の資質・能力の育成に努める。また、個人研究成果報告会(年2回開催中間8月・まとめ12月)において、個々の指導目標の達成状況、指導方法の工夫改善の成果・課題等を報告させる。さらに、教職評価システムを活用し、各教員の研究の進捗状況を聞き取りながら、指導助言を定期的に行い、職員の資質能力の育成につなげる。

＜教職員評価システムの流れ＞

- ア 年度当初に本年度の指導目標と個人研究目標を立て、研究実践をスタートする。
- イ 自己申告授業や通常の授業参観を通して、改善点等について、管理者及び参観者と話し合う。
- ウ 個人研究報告会で成果・課題を報告し、他の職員から指導助言をもらい、指導方法の工夫改善に生かす。

【協働実践事項2】

自律的に学ぶ習慣の定着を図る家庭学習の推進

生徒に自律的に学ぶ習慣を定着させるには、家庭学習の充実を図っていくことが必要不可欠である。そこで、生徒が自律的に学習に取り組めるよう学校独自の家庭学習ノート(通称GSRノート)を作成し、自律的な家庭学習を推進する。この取り組みを無理なく継続して推進していくよう、全職員でチームを編成・分担し、点検・コメントを記入し、全生徒を激励していく。

生徒の皆さんへ: 「GSRノート」の活用について

① 毎日の帰りの会で、1日の授業を振り返って自己評価をします。評価の仕方は、自分自身に「今日の授業は理解できたか」と問い、下記の理解度から、該当するものを選びます。

A とても良く理解できた B まあまあ理解できた  
C あまり理解できなかった

② 今日の授業の自己評価(1)に基づいて、家庭学習の計画を立てます。特に、Cの評価(あまり理解できなかった)と評価した教科を中心に家庭学習を進んで行く。

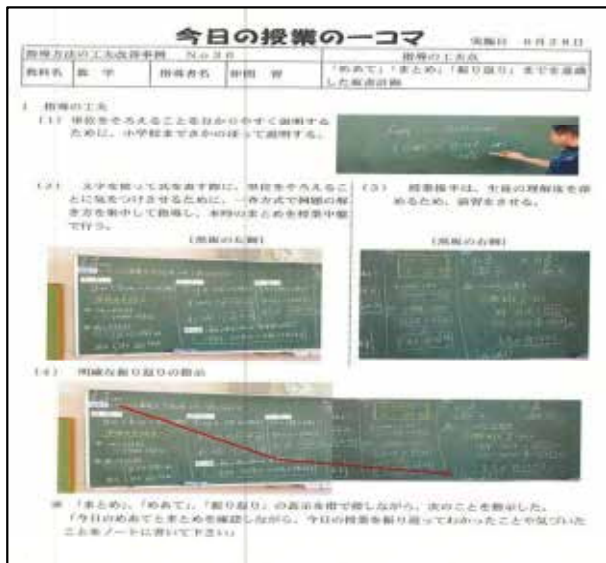
ア 自分で課題を決めて、めあてを書く。  
イ 開始時間を記入し、家庭学習に取り組む。  
ウ 家庭学習を振り返って、感じたことを書く。  
エ 家庭学習の終了時間と家庭学習の総時間を記入する  
オ 最後に就寝時間を記入する。



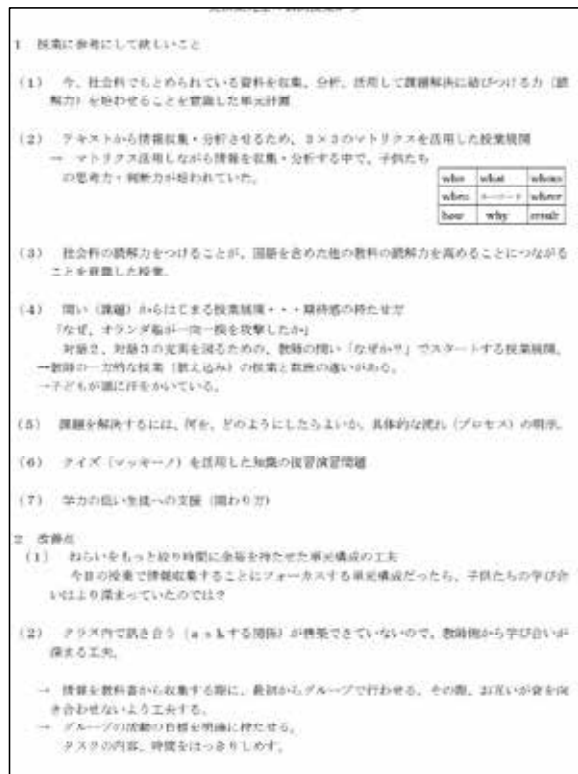
b. 授業観察記録の発行をとおした意欲づけ

日々、授業参観する中で、職員の優れた授業実践を「今日の授業の一コマ(A4 版)」としてまとめ、毎日全職員に配布する。

このことを通して、指導方法の工夫改善に係る職員の意欲づけを図るとともに、互いの実践を共有させることで、同僚性をはぐくむ。提案授業が実施された場合は、特集「〇〇先生に学んで欲しいこと」を追加発行し、職員間で、互いの良さや努力点を認め称える支持的風土の醸成に努める。



特集「〇〇先生に学んで欲しいこと」



c. 週案をとおした個別の意欲づけ

日々、授業を参観し、個々の教師が見せる表情等を観察しながら、コメントを書いて激励することで、職員の意欲を高める。

事例 1 授業でつまづいている初任者に対して

「心」と「気持ち」は同じではない。「心」では常にこうありたいと思っても、外的影響が加わると変化していくのが、「気持ち」だと言われています。

心 → → 気持ち

そうあって欲しいと思う「心」が、そのまま、「気持ち」に伝達されているときは、人は、心地よい状態で過ごすことができる。しかし、何かの原因で心と気持ちをつなぐパイプが詰まると、人は、心が穏やかでいられなくなる。そんな時、「パイプに何が詰まっているか」俯瞰的に自分自身を見つめながら、少しずつ詰まりを取り除くと、また、もとの状態に戻る。

事例 2 初任研を終えて、意欲的に授業研究に励んでいる教師に対して

2年連続して教育行政関係の方に授業を見せることになりましたね。N先生が頑張っているからこそ、声がかかります。来週行われる支援訪問を自分自身を高めるチャンスと捉えて、準備して下さい。

「指導案を書く必要はない」ということですが、略案でもいいので、書いた方がいいと思います。指導案を書くことによって、以下のことが明確になります。

- ① 学習者の立場に立ったねらいは何か
- ② ねらいを達成させるには、どう授業を構築していくか
- ③ 発問はどのように工夫するか。板書はどう工夫するか。
- ④ 「まとめ」と「振り返り」で終了するには時間配分はどうするか。
- ⑤ 授業の評価をどうするか。

※ 授業を創るとき、「何をさせるか(学習活動)」を視点に授業を創っていくと、授業の終わりに「何が定着したか」わからない授業になる。授業づくりの鉄則は、「今日の授業で、何を身につけさせたいか」を視点に創っていくことである。頑張ってください。期待しています。

事例 3 提案授業を意欲的に行う中堅教諭に対して

研究授業、お疲れ様でした。子供たちの成長を感じた授業でした。

ダニエル・キム教授は、「関係の質の向上は、思考の質の向上をもたらし、さらには行動の質、そして結果の質の

向上をもたらす」と唱えています。A先生の授業実践は、キム氏の理論が、そのまま当てはまると思います。

A子先生が、旧担任として取り組んできた人間関係を基盤にした授業づくりが、2年生の数学の授業において、思考の質の向上という形で表れていると思います。この写真は、「教え合い」から「学び合い」という思考の質が最高に高まった瞬間でした。これからも、「先生と生徒」「生徒と生徒」の関係性の質を上げるとともに、この写真の生徒たちのように思考の質が高まる授業づくりを実践してください。

#### 事例4 50代ベテランの教諭に対して

T先生の授業を参観するたび、子ども達がいつも引きつけられ、意欲的に学んでいるので嬉しくなります。発問、板書、視聴覚教材、歌、思わず次は何が出てくるんだろうかと、期待が膨らみます。今日の授業も、冷戦を生徒にわかりやすく理解させるため、ゴジラ誕生の背景に絡めて指導されているT先生の「指導のうまさ」に、感心しました。ポスターの提示、冷戦の縮図を完結にまとめた板書は、今年目指している「授業のユニバーサル化」の条件にぴったり当てはまる内容だと思います。これからも「わかる社会」「楽しい社会」をよろしくお願いします。

#### 事例5 水泳の指導で悩んでいる教師に対して

テレビで「パタパタ」のように犠牲語(フランス語で「オノマトペ」)の力を活用した跳び箱の指導を見て衝撃を受けました。S先生もすでに知っているかもしれませんが？

サー タン パッ トン

(助走) (踏切) (手をつく) (着地)

擬声語を活用した跳び箱の指導で、まったく跳び箱が跳べなかった子供たちが跳べるようになり、とても驚きました。実際に「オノマトペ」を活用した授業がないか調べたら、「文部科学省小学校中学年体育～06跳び箱運動」がヒットし、観てみたらすばらしい授業が展開されていました。水泳が苦手な女子の指導に生かされるかどうか分かりませんが、少しでも先生のヒントになればと思います。紹介しました。

#### 事例6 授業がうまく行かない臨任の教諭に対して

指導方法工夫改善に積極的に取り組んでいただき、ありがとうございます。毎日、M先生の熱心に教材研究に取り組んでいる姿を見るにつけ、授業づくりに対する熱い思いを感じ、いつも感心しています。「子ども達は、ダイヤモンドの原石である。教師の役目はその原石を輝かせ

ることである。しかし、ダイヤモンドは、ダイヤモンドでしか磨けない」これは、教師が日々自己研鑽していないと、生徒を磨くことができないことを喩えたことばです。これからも子供たちに「できた」「わかった」の感動を味わわせる授業づくりのために、さらに精進しよう！！

M先生、時にはクールダウンも必要です！！

#### 4) 協働実践する教師コミュニティづくり

久松中学校において教師コミュニティづくりをしていく際、経営ビジョンに基づき、戦略と戦術を立て取り組んできた。その取組を「The Transformation Model」を活用し、考察する。

校長は、目の前の教師コミュニティの実態を把握し、その教師集団の成長にとって必要な因子を導き出し、一つ一つの因子が連鎖し合い、コミュニティが成長していけるよう組織マネジメントしていくことが肝要である。そこで、コミュニティの成長を促進する因子を明らかにし、その要因が相互に作用し合い、コミュニティの成長につながっていくように以下のようにマネジメントした。

##### 【教師コミュニティの成長を促す因子】

**Environment**: 教育環境・学校風土

**Strategy**: 授業改善戦略

**Core Process**: 授業づくり・校内研究会

**Structure**: 研究体制

**Systems**: 実践事項の設定・実施

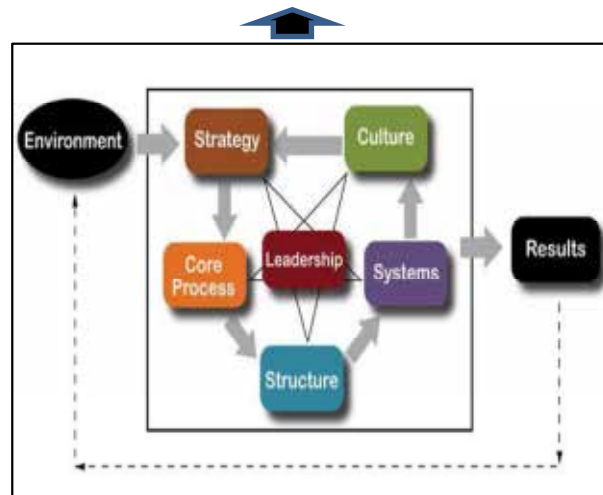
**Culture**: 同僚性・人間関係・協働性

**Leadership**: 管理職・研究主任・各担当

**Results**: 取り組みの成果・課題、

##### 【教師コミュニティの成長のプロセス】

教師コミュニティの成長



The Transformation Model

a. 教師コミュニティの成長を促す要因の具体的な内容

① Environment (教育環境・学校風土)

教育環境を創り出す人・物・事は、教師コミュニティの成長に影響を及ぼす。また、教育環境は、教師コミュニティの成長を左右する学校風土として根付いていく。

② Strategy: 授業改善戦略

ア 「ベクトルを揃えて一点突破！」のスローガンを掲げ、全職員の意志を授業改善に向けさせるとともに、研究主任と ICT 活用研究主任をリーダーに教職員が互いを信頼し協働実践できる教師集団をつくる。

イ 全職員が同じ方向性で研究実践に取り組めるよう協働実践事項を設定する。また、授業公開が頻繁に行われるよう、50代の教員の授業公開を年度当初に行わせる。

ウ 教師が日頃から研究実践しやすいよう ICT 環境を整えるとともに、週時程の弾力化を図る。

エ 同僚性・研究実践に溢れる教師コミュニティを創造するため、「授業の一コマ」を介して、互いの実践の良さを称賛する関係性を構築する。

③ Core Process: 授業づくり・校内研究会

ア 学校全体で公開授業が日常的に行われるよう、各自他の教員に授業を参観して欲しい日時を職員室の入り口に設置したホワイトボードに書き込み、公開授業を実施する。

イ ミニ授業研究会を実施する。

ウ 個人報告会を実施する。

エ 日々の管理職の授業参観・授業の振り返りを放課後実施する。

④ Structure: 研究体制

ア 研究主任・ICT 活用研究主任を核とした、協働研究体制の構築と管理職のバックアップ体制を強化する。

イ 積極的な授業公開を柱にした研究体制を確立する。

⑤ Systems: 協働実践事項の設定・実施

ア 協働実践事項に基づく授業づくりを行う。

イ 教材研究のツール(プランシート)を活用した授業改善を推進する。

ウ 自律的学習を促す家庭学習ノートの活用を推進する。

⑥ Culture : 同僚性

ア 日々の実践を通して、教科の枠を超えて、生徒の学びの姿から協議し、真摯に学び合う同僚性を培う。

イ 子供を話題の中心に据え、常に対話の絶えない職員室の風土を醸成する。

⑦ Results : 結果の考察・吟味

実践を省察し、Environment (教育環境・学校風土) の変化・教師コミュニティの成長へに確実につなげるため、Results (結果) を吟味する。

b. 取り組みの結果についての考察

平成 29 年度のアンケート調査結果と平成 26 年度～平成 29 年度間に勤務した旧職員への聞き取り調査を実施し取り組みの成果を考察する。

①平成 29 年度のアンケート調査結果の考察

教諭 11 名回答 (Result①) 数字は%

職員用調査項目	5 月	12 月
① GSR プランシートを活用し、ねらい・めあて・まとめ、板書事項などを事前に検討し、授業に臨んでいますか。 「はい、よく行った」 「どちらかと言えば行った」 「あまり行わなかった」	54.5 18.2 27.3	81.8 18.2 0
② 生徒の発言や活動時間を確保するため、ICT 機器等を活用し、教師の説明の焦点化や明確化を図っていますか。 「はいよく行った」 「どちらかと言えば行った」 「あまり行わなかった」	18.2 63.6 18.2	54.5 45.5 0
③ 身につけさせたい力を踏まえ、「めあて」を提示していますか。 「はいよく行った」 「どちらかと言えば行った」 「あまり行わなかった」	18.2 72.7 9.1	81.8 18.2 0
④ 生徒の考えを引き出し、思考が深まるよう、発問や指導を行っていますか。 「はいよく行った」 「どちらかと言えば行った」 「あまり行わなかった」	9.1 72.7 18.2	45.5 54.5 0
⑤ 生徒一人一人が、友達に頼らずに思考する場面を設定し、生徒自身の考えを持たせるようにしていますか。		

「はいよく行った」	9.1	54.5
「どちらかと言えば行った」	62.6	45.5
「あまり行わなかった」	27.3	0
⑥ 生徒が互いの考えや意見を交換し、思考を深め広げられるよう、学習形態を工夫し、言語活動（「学び合い」）の充実を図っていますか。		
「はいよく行った」	18.2	81.8
「どちらかと言えば行った」	54.5	9.1
「あまり行わなかった」	27.3	9.1
⑦ めあてと正対したまとめ・振り返りを行うとともに、生徒が新たに発見したり、気づいたことを全体で確認し、発表させていますか。		
「はいよく行った」	9.1	45.5
「どちらかと言えば行った」	72.7	36.4
「あまり行わなかった」	18.2	18.2
⑧ プランシートを活用し、評価の場面を設定・評価し、授業改善につなげていますか。		
「はいよく行った」	18.2	54.5
「どちらかと言えば行った」	45.5	45.5
「あまり行わなかった」	36.4	0
⑨ 授業研究会等を通して、教師の学び合いが深まり、同僚性は高まっているとおもいますか。		
「高まっている」	45.5	81.8
「どちらかとも高まっている」	45.5	18.2
「あまり高まっていない」	9.1	0

<調査結果の分析>

- ア 調査項目①、③において、8割の教師が肯定的に回答していることから、ほとんどの教員がプランシートを活用し教材研究を行い、身につけさせた力を踏まえてめあてを提示し、授業実践に臨んでいる。全職員が、プランシートを作成・活用しながら、授業改善に同じ方向性で取り組んでいると言える。
- イ 調査項目②において、ICT機器を活用し、導入を工夫する教師が増えた。これまで授業後半において生徒に振り返りの時間を設けることに苦心していた教師が、ICT機器を活用し導入の簡素化を図り、本時の学習内容を時間をかけずに生徒に掴ませることで、授業後半で余裕を持って授業を行うことができるようになった。

- ウ 調査項目④⑤から、学習形態を工夫し、生徒が互いの考えや意見を交換する場面を設定し、思考を深め広げる言語活動を取り入れる教師が増加したことが分かる。これまで根強く実践されてきた教師主導型の授業から脱却し、生徒が協働探求的に学び合う授業へ転換を図ろうとする教員が増えてきたと言える。
- エ 授業研究会等の調査結果から、「教師の学び合いが深まり、同僚性が高まっていると思いますか」の質問に、「とても高まった」と回答している職員が全体の81.8%である。職員一人ひとりが、授業を積極的に公開しながら資質・能力の向上を図る中で、職員間の学び合いが活性化し、同僚性が高まったことが分かる。同僚性あふれる教師集団を創造するには、校内研究の活性化を図り、職員間の日常的な学び合いの場をより多く設定することが、とても効果的であると捉えることができる。

② 教職員の振り返りの分析

「Result①」がEnvironment（教育・学校風土）にどのように影響を及ぼしたか、当時の職員の振り返りから分析する。

【分析の視点】

- ① Strategy: 授業改善戦略
- ② Core Process: 授業づくり・校内研究会
- ③ Structure: 研究体制
- ④ System: 協働実践事項の設定・実施
- ⑤ Culture: 同僚性・協働性
- ⑥ Leadership: 管理職・研究主任・各担当

【分析方法】

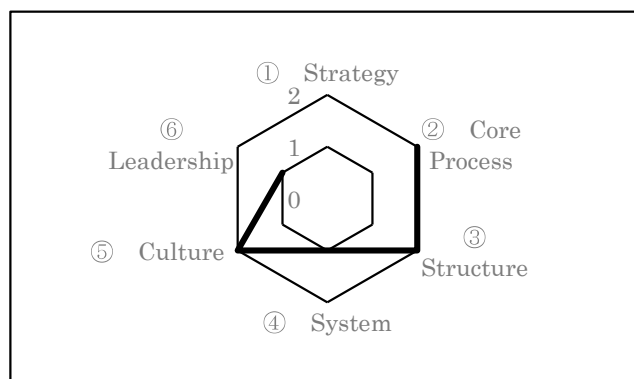
- ① 旧職員の中から、研究正副主任2名、50代職員1名、40代職員1名、30代職員1名、初任研教諭1名を抽出し、次の2点について自由に記述してもらう。記述内容から、教師コミュニティの育成に関連する因子を探り出し、分析する。
- ア 久松中勤務期間において、自分自身が成長したと感じること
- イ 久松中勤務期間において、組織力や同僚性等について感じたこと
- ※ 職員のコメントの中の番号は、分析の視点の番号である。

### ＜研究主任＞

久松中学校で勤務した期間、自分自身が成長できたと感じられることは、自己の教師力です。学校長の学校運営方針、経営計画・目標などを理解し実践していくために、学習指導要領や沖縄県の施策等を何度も読み返しました。③→それらが縦軸に貫かれていることと、私たちの校内研究・実践が横軸で展開されていることに気付いたことが自分自身の実感の伴った学びです。また、②→授業づくり・指導力を高めることもできたと思います。②→学習内容に応じた学習形態の工夫、座席の工夫（コの字）はこれまでの指導観を見直すきっかけとなりました。②→（図1）手立て①②を意識した授業づくりは、教師主導の講義型一斉指導から生徒主体の自学自習「なりたい自分になるための学び」へと大きく転換が図られました。特にコの字型座席配置では黒板前の黄金エリアを「どう授業展開に生かすのか」、そのための学習課題（ジャンプの課題等）を単元構成や授業展開の中に「どう仕組んでいくのか」について教材研究することがとても楽しかったです。ICTの活用については、教師用デジタル教科書を用いた実践ぐらいしかできませんでしたが、配慮を要する生徒への個別支援に効果があるように感じました。②④→授業プランシートを活用した授業づくりは、指導力（授業改善の教材研究ツール）という面で大変効果がある実践的研究となりました。「身に付けさせたい力」とは何なのか、教科（数学）を通して「何を身に付けさせたいのか」、教科を学ぶ意義や、単元をデザインすることの必要性、重要性について気づくことができました。教師の日々の授業改善が子供たちの学習改善に大きく影響を及ぼすことも感じました。私のGSR授業プランシートを見た数名の生徒が、「先生も頑張っているんだね」「自分もGSRノート（家庭学習）頑張ろう」などの対話も多くありました。

研究主任として一番感じたのは、③→「ミドルリーダー仲間」が多く存在し、いろんなアプローチの中でベクトルが徐々に一つにまとまっていったことが大きな推進力、原動力になったと思います。（生徒指導があまりなく授業改善を軸に研究推進できた）。⑤→何時でも何処でも誰でも授業参観できる雰囲気があり、職員室が和やかで、生徒の話題や授業づくりの会話が多かったです。その大きな要因となったのが、⑥→「今日の授業の一コマ」です。指導方法の工夫改善事例として、校長が授業参観された際に各教科・各教諭の指導の工夫点を「価値付け・承認」して頂いたことです。生徒と同じで、教員も校長から「授業実践を取り上げて全職員に共有してもらえた」ことは嬉し

かったです。安心→所属→承認→自立に繋がりモチベーションも高まりました。No.1から最終回（No.147）は私の財産となっています。このように、仲好し仲間の組織というよりは、⑤→お互い高め合う教師集団が徐々に構築されていった感じがします。



### ＜研究副主任（ICT活用研究担当）＞

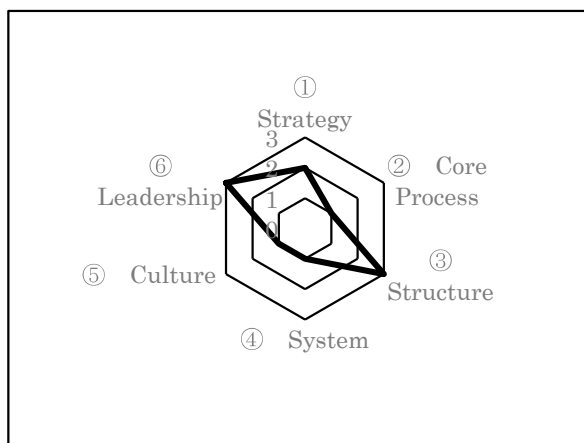
・授業づくりについて、これまで以上に楽しみながら取り組むことができた。①→授業について対話1～3の方針が示されており、それを基に生徒の姿をイメージしながら取り組めた。また、⑤→生徒の学ぶ意欲や支持的風土が醸成されており、学びあい、助け合いの中で生徒が課題にチャレンジしていた。またそれに応えようと教師集団も互いに切磋琢磨して、同僚から学ぶ姿勢もあり、教師集団が学ぶ意欲が高かったように思えます。校長が4月の職員会議で方針を明示し、それを教職員と共有していた点が大いだと思います。③→校内研修担当者としては、先輩教師が多い中、先輩教師から協力が得られたことが校内研修の推進を図ることができたと思います。また、マイノートから④→プランシートを活用することで、学習指導要領をより意識した授業づくりにつながった。

③→指導力については、やはり多くの公開授業を実施することで鍛えられたと思います。また、自己申告授業を日常化することで、他の先生方や生徒も見られることに良い意味で慣れ、公開授業を楽しんでいる様子も感じられた。自己申告授業を日常化するにあたり、可視化することで、職員への意識を高められることにつながったと考えています。③→職員連絡会で口頭で伝え、ホワイトボードで職員室入り口に記入できる箇所を作ることで「いつ、だれが、どこで、どの教科を」を見れるようにした。また、だれでも書き込めるように、校内研担当者として、毎日誰よりも先に記入することで、呼び掛ける人も率先して取り組んでいる姿勢を示した。

③→ICT機器を活用した研究では、先輩授業者が研究の意図を踏まえて、苦手なものにチャレンジする姿勢を

他の職員に示すことで、他の先生方へICT機器を活用した授業づくりに向けてやる気に火をつけることにつながった。②⑥→また、先生方のやる気とそれを活用した授業の目標達成に向けた授業展開がうまくいくように、さらに子供たちの活用がうまく繋がるように、研究主任として、生徒のICT機器活用スキルを自分の教科(英語)で高め、他の先生方がスムーズに活用できるように取り組んだ。

①→校内研修で授業研究会を行うにあたって、対話1～対話3があり、教科の枠を超えて、生徒の姿から協議し、深めることができたと考えます。それは教師の授業を見る視点が揃ったからだだと思います。また、⑥ 授業でやりたいと思っただけでできるように校長・教頭がそういう環境づくりに努めていたことも大きかったと思います。  
⑥→校長、たまに教頭による授業の一コマを活用し、職員間での互いの取り組みを称えあい、またそれぞれの授業づくりに取り入れていたので、同僚性を高めるものとしてとても有効だと感じ、自分のものが紹介されると「自己肯定感」も高まりました。



### <50代ベテラン教諭>

“求める授業はこれだ”と、校長自らトップバッターで提案授業。すべては、これから始まった。⑥→「トップがやってみせている訳だし、私も(私たちも)やらないわけにはいかないな」強烈なリーダーシップを感じました。さらに①→「1週間後の提案授業をやるように」との指示には、「何をおっしゃるのやら、何をせれば良いんだー!」とあれやこれや悩んだことを憶えています。⑥→最初に公開授業を行うことで、(教科に関係なく、授業づくりを提案できたつもりです..)アナログとデジタルの共存(電子黒板と原始黒板等)や発表力(表現力、思考力)について、何よりも、以後、「授業づくり」に関して、⑤→素敵な仲間(同僚)と深く々熱く々語り合ったことも懐かしく

思います(授業の話で6時間以上飲みました。しかも何回も。端から見ればこの人達が楽しいんだろうと、周りからみられていたんだろうな)。

さらに、③⑤→普段の授業でも、覗き覗かれ、授業参観ではなく、「いつでも授業参加」のような関係ができたことも大きな財産となっています。授業づくりを通して(50分完結型授業の実践というハードルをお互いに頑張って飛び越えたことで)同僚性も良くなったのではないかと思います。

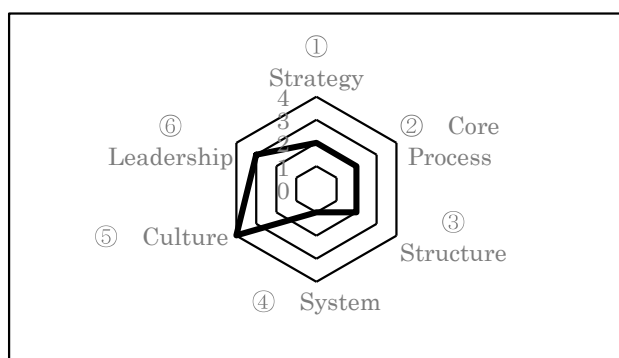
久松の先生方からも、本当に多くの技術・思い等学ばせてもらいました。校長が、それぞれの先生方の授業における「真似して欲しいポイント」や⑥→「GOOD JOB!な板書、活動内容・・・」を写真や説明文付きで評価してくれたおかげだと思います(今でもあります)。これは、教師の資質・能力をアップさせるための校長の気遣いなのですね。ありがとうございます。これだけでも、職員の指導力アップ、そして同僚性アップ、職員皆が同じ方向をめざす(ベクトルをあわせて一点突破だったかな)組織力・団結力もアップです。本当に、校長がリーダーだった頃の久松中は職場としても大好きで良い思い出も多くあります。感謝しています。

校長といえば、学び合い、コの字配置の教室。あのころは、コの字配置に関しては、私は否定的でした。その理由等は、当時校長に話しました。あれから5年がたち、世の中はコロナ禍でソーシャルディスタンス。教室でも2mあける。ペア学習も難しい、グループ学習(無理に決まっているでしょう)の環境になってからなのか、②④→学校の存在価値(ふれあい、学び合いができる)を再考しています。そして、授業づくりのなかで、教師対生徒の関係でなく、お互いの存在を意識し(他者との関わりを意識し)学習をすすめるスタイルが大切なのではという思いを強くしています。それから考えると、強制的ではありますが、「コの字配置」はありだと思います。教室が36名とギュウギュウで、余裕がありませんが、お互いを意識し合う配置・配列の工夫をしていきたいと思っています。

②→ICTの活用に関しては、「インパクトでコンパクトのある授業導入」にするため大いに活用し、授業の効率性・効果性をあげることができたと思います。最近では、「映像授業」や「有効なWEBページ」「デジタル教材」も充実しています。さらに、googleでのclassroomとかパソコン・クラウドをいかに有効に活用できるかが鍵となっているようです。そうすると、⑤→教師は、教えるという立場でなく学ぶ者をサポートする立場にならないといけないと思います。そうすると、生徒も先生も学びの方

向と一緒にいるような気がします。すると、教師と生徒の関係も良い関係になること間違いなし。授業を楽しみにする生徒や先生の顔が目に見えますよね。特に 2 年連続で K 先生のクラス副担任をしました（3 年 2 組）。G S R（家庭学習ノート）の取り組みで、担任、私、校長はチームで朝の学習に対応しましたね。実は、このチーム編成のおかげで、担任が好きになり、校長が好きになったのです。3 人組ではありますが、⑤→一人じゃない嬉しさ半端なかった

①→週時程の工夫や「G S R（自律学習）の取り組み」「教室環境のUD化」など、全体でそろえて取り組むことの大切さも学べたと思います。今後も大切にしていきたいと思っています。



#### < 40代中堅教諭 >

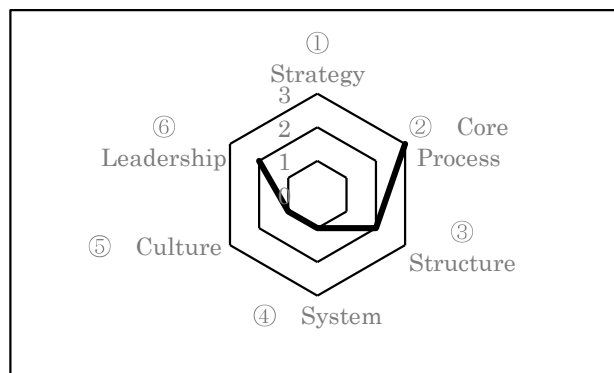
久松中学校で教諭として務めた期間は、自分自身も 10 年研をむかえる節目の年度でもあり、「中堅教師」としての②→スキルを向上させることができたと思います。特に、授業づくりにおいては、学校の規模で教科 1 人の環境であったことが、逆に自らの指導スキルを磨きたいという意欲を掻き立てていました。それまでの経験をもとに、教材研究を深めた授業づくりに努め、少人数クラスの利点を生かして生徒の理解度を即座に把握し実践につなげるという PDCA のサイクルも構築できるようになりました。このように取り組んでいた授業づくりにおいて、さらに、④→深みと広がりを引き出してくれたのが学校全体で取り組んだ共通実践でした。

③→多くの共通実践に全職員で取り組みましたが、②④→「座席の工夫」「学び合い、対話」「身に付けさせたい力」の授業改善の視点においては、自分の指導の弱みでもあったので、理論研究から実践までを指針を示して頂きながら、工夫・改善できたことは、指導力の向上につながったと実感しています。②④→「学び合い、対話」の視点は、今求められている主体的・対話的な深い学びとも重なることが多く、明らかに教師としての指導観を築いてくれました。また、「身に付けさせたい力」を明確にした

授業づくりは、「めあてに正対したまとめ」や「振り返りの充実」などに現在でも生かした実践に取り組んでいます。

⑥→校長先生自ら授業改善の舵を取り、学校全体で取り組むべき方向性が示されている中、自分自身が教科指導・学級経営に尽力できました。何校か勤務した今だからこそ、改めて、③⑤→久松中学校は恵まれた職場環境であったと確信しています。印象深いことは、校長先生による日常的な授業参観です。初めの頃は、どちらかという消極的に捉えていましたが、教科の枠を超えたアドバイスや温かい励ましを重ねて頂いたことで、指導力アップはもちろんですが、指導の工夫・改善を職員間で共有する機会が増えるようになっていました。⑤→授業談義をすることが職員室で当たり前になり、授業を参観し合うことが特別ではなく日常的に行える雰囲気になっていたことが自分自身の向上心にもつながりました。⑤→授業というツールを通して育まれた同僚性は、学校という職場環境において最高のチーム力であったと思います。そこには、⑥→校長先生の強いリーダーシップが土台となったことは間違いありません。最近課題となっている働き方改革や校務の平等性を改善していくためにも、久松中学校の取り組みから育まれた組織力や同僚性は大切だと思います。

また、個人的ではありますが、中堅教員として経験年数の浅い教員との関わり方、学校全体に関わる校務分掌の取り組み方も学ぶことが多くあり、その経験は他地区へ異動した現在にも生かすことができます。



#### < 30代中堅教諭 >

「久松中学校で勤務した期間を振り返って、自分自身が成長できたと思えることを挙げてみると、

②→身に付けさせたい力を意識して授業の目標を設定しめあてから振り返りまで一貫性のある授業を行うことを心がけていました。継続することで、より見通しを持って授業計画や実践を行えるようになったと思います。

③→授業に対する生徒の反応や管理職、同僚からのフ

フィードバックをもとに省察を深め、指導と評価の一体化を図ることを強く意識するようになりました。 どうすれば、②→ICTを効果的に活用できるのか模索し、授業で積極的に活用した。研究指定校ということもあり、研究授業や成果物等を通して他校の先生方にも得られた成果や課題を共有するよう努めました。久松中学校での経験は、同じくICTの研究校である異動先の学校でもとても役に立ちました。

⑤→不登校や支援を必要とする生徒に対して、管理職、学年所属や関係職員、関係機関(市の適応指導教室など)と連携した支援や指導を行うことができ、そのような多くの関わりや周りのサポートを通して生徒理解を深めることにもつながりました。校長先生をはじめとして担任以外の先生方も生徒を常に気にかけて見守りながら積極的に関わってくれたことが心強く、とても有り難かったです。

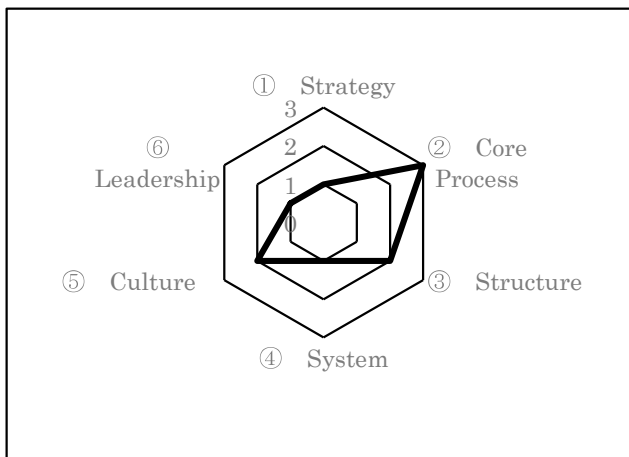
②→1年と3年の担任を2回ずつ受け持たせてもらう中で、生徒の成長を実感し、長期的な目で生徒を見守りながら、心はしっかりと寄り添うということの大切さを学びました。また、発達段階に応じた指導や学年に応じた学級経営を心がける中で、生徒と同じく教師として自分自身の成長も感じました。

久松中学校における勤務した期間の職員の指導力、組織力、同僚性等について感じたことを挙げると、⑤③→職員の指導力や同僚性はとても高かったと思います。普段から、同じ教科に限らず他教科でも、授業での取り組みや生徒の姿について話をする機会が多かったことや、校内研や申告授業においても互いの授業を参観し合い意見交換を行うことで、他教科に対しても共通した視点を持って授業を見る力が身に付いたように感じています。特に研修という特別な機会でなくても、興味のある授業は気軽に見せてもらうなど、職員間にオープンな雰囲気がありました。⑥→校長先生による授業参観が日常的に行われていたので、その分フィードバックを多くもらえたことで授業の改善や意識の向上につながったと思います。

④⑤→GSR(家庭学習や朝ドリル)の取り組み方法を決める際は意見の対立もありましたが、正直な意見を出し合える雰囲気があったので、最終的には全職員体制で行うことができ、それによって学力向上に対する意識の高揚や組織全体でベクトルをひとつにした指導を行うことができたと感じます。

⑤ →授業や学級経営などについて悩んだ時には、必ず相談に乗ってくれる同僚が周りにいました。先輩後輩の垣根を越えて忌憚のない意見を言い合い、共に学び合う

関係性が構築されていたと思います。例えば、T.Tで行っていた教科の授業では話し合いを密にし、必ず共通理解や確認を行って授業に臨みました。また、⑤→異学年の担任と特活や道徳の授業を協同で計画、実践を行ったり、学年所属の職員に学級の授業(特活など)に協力してもらい積極的に生徒と関わってもらうことで、連携した指導を行うことや相談できる関係づくりにつながったと思います。



<初任研教諭>

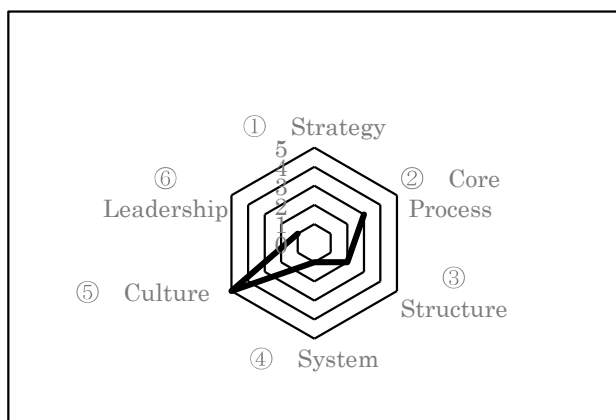
『教師力』と問われると、「専門的知識」や「授業のうまさ」など、授業に対する姿勢はもちろんのこと、支持的風土づくりに基づいた学級経営、生活習慣や規範意識の指導など多岐に渡ります。その中でも久松中学校勤務時代に教師として②→自分自身がもっとも成長したと感ずることは「授業づくり」です。当時の僕は初任者ではありませんでしたが、年齢も40歳を超えており、教師指導型の授業スタイルがメインになってしまった感が否めませんでした。教科書の内容を中心とした教え込みのため、教師が一方的に説明する場面が多く、生徒が主体的に活動する場面が少なかったように感じます。久松中学校で取り組んでいた研究テーマ「思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫・改善」では②→ゴール(まとめ)を意識した授業づくりの面白さを味わうことが出来ました。子供達とのやりとりの中で本時の学習の「めあて」をどう設定するか、生徒の興味・関心を引き出すための「発問」は何が良いのか、思考を深めるための主体的な活動には何が適切なのか、「めあて」と「まとめ」の整合性をどうもたせるかなど、授業の中で子供達が「何を学ぶのか」「何が身についたのか」が実感できるような授業にするために格闘する日々でしたが、⑥→校長先生をはじめ、教頭先生や指導教諭の暖かいサポートもあり、格段に授業改善が進んだと実感しています。また、久松中学校独自で作成した②



④→授業のプランシートも、とても良かったと感じています。学習指導要領との関連性や発問の工夫、「めあて」や「まとめ」などを記入する欄が設けられており、本時の授業構成をどうするかイメージしやすく、何時間かまとめて計画を立てることで単元構成をどうするか、どの場面でのどの観点の評価を行うのかなど、とても役に立ちました。

当時の⑤→久松中学校の職員は、とても研究熱心先生が多く、授業に対しても前向きにチャレンジしているイメージがあります。公開授業も積極的に取り組んでいましたし、②③→僕自身も他の初任者の3～4倍は管理職や指導教諭に授業観察をしてもらい、色々とアドバイスを受けることが出来ました。とても感謝しています。また、⑤職員同士も気軽にお互いの授業に参加して楽しんだり、教科を超えて「〇〇先生だったら、どういうアイデアありますか？」と相談したり、「この前の〇〇の授業で〇〇について学習した内容を、今度の授業に関連させて〇〇しませんか？」と教科を横断した学びを協力してもらったりと、とても同僚生が高かった印象が強いです。善信校長先生が掲げていた①→「ベクトルを揃えて一点突破！」のモットーが組織として子供達を育てていこうという組織力に大いに役立っていたと思います。

改善点としては、多くの研究指定校を受けていたので、とても勉強になりましたが、職員の多忙感や、もっとじっくり教材研究に取り組む時間が欲しかったという点です。年齢に関係なく、優秀な職員が多くいたので、時間に余裕を持てたら、もっと授業づくりの経験やアイデアを教えてもらったり、一緒に教科を横断した授業づくりに取り組んだり生徒指導の相談や情報の共有など、いろいろと相談したかったなというのが本音です。



<分析の総括>

① 全体的な特徴

ア 研究主・副主任は、「授業改善戦略」「共通実践事項」「研究体制」の因子に多く触れている。

イ 50代教諭は、「管理職の関わり」「同僚性」に多く触れている。

ウ 中堅教諭は、授業作り、共通実践事項について多く触れている。

エ 初任研教諭は、授業づくり、研究体制について多く触れている。

② 特徴からみえてくること（傾向）

上記の特徴からわかるように、経験年齢・役割によって、自身の成長やコミュニティの成長を促進したと捉えている事象（因子）が異なっている。初任研、中堅は、授業研究を軸に自己や教師コミュニティの成長を捉えているのに対し、50代は同僚性、管理職のリーダーシップを軸にして捉えている。また、年齢、役割にかかわらず、同僚性が培われたことが教師コミュニティの成長を促進した因子として捉えている。これらの分析結果を鑑みると、「The Transformation Model」に基づき教師コミュニティの成長を促す因子を模索し、実践研究を進めていくことは、教師コミュニティを成長させるのに有効であると言える。さらに、年齢、役割によって自分自身の成長やコミュニティの成長をさせたと捉えている因子が違うという結果から、学校長が各職員の年齢、役割等に基づきながら、どの因子を意識しながら各職員にアプローチしていけばよいかを判断する材料にもなり得ると考える。

③ 生徒 133 名アンケート調査結果 Result②

生徒用調査項目	4月	12月
①自分のために進んで学習に取り組んでいるか		
「当てはまる」	43.6	35.7
「どちらかと言えばあてはまる」	42.9	49.6
「あまり当てはまらない」	7.5	7.8
「当てはまらない」	6.0	7.0
②平日の家庭学習の時間は何時間ですか		
ア 2時間以上	24.1	30.2
イ 1時間以上 2時間未満	52.6	16.3
ウ 1時間程度	10.5	23.3
エ 30分未満	12.8	30.2

③ 休日の家庭学習の時間は何時間ですか		
ア 2時間以上	34.6	35.7
イ 1時間以上2時間未満	16.5	38.8
ウ 1時間程度	39.8	10.1
エ 30分未満	9.0	15.5
④ 授業のはじまりの先生との対話で、「今日の授業は何をするのか」が分かり、意欲的に取り組んでいかすか		
「当てはまる」	42.1	36.4
「どちらかと言えばあてはまる」	44.4	51.9
「あまり当てはまらない」	9.8	7.0
「当てはまらない」	3.8	4.7
⑤ 授業中に、次のような疑問を持ち、自分の力で解決しようとしていますか。「あれ、どうしてかなあ？」 「なぜ、そのようになるのかな？」 「どのように考えればよいのだろう？」 「どうしたらとけるのかな？」		
「当てはまる」	38.3	48.1
「どちらかと言えばあてはまる」	12.8	5.4
「あまり当てはまらない」	6.0	3.9
「当てはまらない」	0	0
⑥ 授業中、自分の考えや意見を説明したり、友達の考えや説明を聞いて、さらに自分の考えを深めるようにしていますか		
「当てはまる」	42.9	35.7
「どちらかと言えばあてはまる」	38.3	51.9
「あまり当てはまらない」	12.8	9.3
「当てはまらない」	6	3.1
⑦ 授業の終わりで「今日の授業の内容が理解できた。できるようになった」と感じるがよくありますか		
「当てはまる」	48.9	51.2
「どちらかと言えばあてはまる」	42.1	40.3
「あまり当てはまらない」	6.0	6.2
「当てはまらない」	3.0	2.3

⑧ 学習したことを振り返って、「なるほど」と思うことや新たに発見したりすることがありますか		
「当てはまる」	44.4	51.2
「どちらかと言えばあてはまる」	43.6	41.1
「あまり当てはまらない」	7.5	4.7
「当てはまらない」	6	3.1

全国学力学習状況調査全国平均点と本校の平均点の差の推移表 (表1)

	H26	H27	H28	H29
国語A	77.9 (-1.5)	78.6 (+2.8)	76.9 (+1.3)	79.0 (-0.4)
国語B	46.2 (-4.8)	69.8 (+4.0)	70.1 (+3.6)	71.0 (-1.2)
数学A	70.8 (+3.4)	65.8 (+1.4)	67.8 (+5.6)	69.0 (+4.4)
数学B	57.4 (-2.4)	44.8 (+3.2)	49.8 (+5.7)	51.0 (+2.9)

＜アンケート調査結果の分析＞

- ア 調査項目①、②、③、④は本研究の取り組みが生徒の自律的な学習にどのような効果をもたらしているかを検証する項目である。自分自身のために学ぶことに対する意識の変容は、あまり見られないが、家庭学習に取り組む時間に関して変容が見られる。平日における生徒の家庭学習への取り組みに2極化が見られるが、成果として休日に家庭学習に取り組む生徒は、増えてきた。
- イ 調査項目④～⑧は、「教師の回答」と「生徒の回答」を比較し、「指導方法の工夫改善の成果」の効果を検証するものである。12月の段階で、指導方法の改善の成果について肯定的に捉えている割合は教師が高い。一方、生徒の割合は、若干、高まってきたが、教師の割合程には高まっていない。
- ウ 調査項目④（教師との対話1【導入】）については、若干、4月に意欲的に取り組んでいた生徒が12月で減少している。
- オ 調査項目⑤（自己との対話2【自学習】）については、授業中に疑問を持ち、自己解決しようとする生徒が増えてきた。
- カ 調査項目⑥（友達との対話3【対話的な学び】）

については、授業中に友達と対話しながら自己の考えを深めていこうとする生徒が増えてきた。

キ 調査項目⑦自己との対話 2 (達成感、理解度) については、授業の終わりに感じる「達成感」「理解度」については、90%以上の生徒が肯定的に捉えている。

ク 調査項目⑧自己との対話 2 【新しい問いの発見】については、授業を振り返り「アハ体験」「新しい問いの発見」を90%以上の生徒が、味わったことがあると回答している。

#### <分析の総括>

生徒のアンケートの回答を見てみると、全調査項目において、「よく当てはまる」と答えた生徒の割合は全体的に高まっていない。他方、教師は、研究実践の成果を肯定的に捉えており、両者において指導方法の工夫改善について差異があることが判明した。そのため、今後、より一層、生徒が発する声、行動・態度を多角的・多面的に評価・分析しながら、指導方法の工夫改善を図っていくことが求められることが明白になった。

研究の成果として、家庭学習の時間については、調査結果から全体的に家庭学習する時間数が長くなっていることが挙げられる。長くなってきた要因として、日々、「GSR ノート」を活用して自律的に学習ができる生徒が増えてきたことが挙げられる。さらに、研究を推進した4年間における全国学力学習状況調査の全国平均点と本校の平均点の差の推移表(表1)を見ると、年を追う毎に全国平均を維持するようになってきた。このことから久松中学校で学力向上対策の目標に「学ぶ意欲に溢れ、自ら問いを発しながら対話を通して深く学ぶ生徒の育成」を目標に掲げ、取り組んできた研究実践は、ある程度の成果を得たと考える。「馬を水辺に連れていくことができても水を飲ませることはできない。馬が、水を自ら飲みたいと思えるようにすること」を柱に、授業の随所において、生徒の学ぶ意欲を喚起することを意識し授業を実践すれば、結果として学力向上につなげることができると言える。

一方、自律的学習の状況を見る問い(「自分のために進んで学習に取り組んでいますか」)に対する生徒の回答の割合が、あまり変わらなかったというのは本研究にとって大きな課題として残った。

そこで、この課題を考察するため研究全体を俯瞰してみると、「総合的な学習の時間」の授業改善に対する取り組みが十分になされていなかったことが、その原因として挙げられる。その当時の久松中学校の総合的な学習

の時間は、全体テーマ「漕ぎ出せ、自分の未来に向かって」の下、1年生においては「福祉体験活動」、2年生においては「職場体験活動」、3年生においては「進路・修学旅行」を核に展開されてきた。単元計画には、学年毎に育てたい資質能力を掲げられ、学習のプロセスも「課題をつかむ」「追求する」「まとめる・広げる」となっており、形上は探究的な学習になるよう計画されていた。しかし、子供達の学習の様子や発表内容を振り返ってみると調べ学習の域を脱せず、前年踏襲の学習課題に沿って調べることが主な学習だったことは否めない。やはり、今求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現には各教科における研究はもちろんのこと「各教科学習で行う思考・表現活動」、「道徳科における価値の意識化」、「特別活動における集団的な意志決定」等に関連付けて大単元を作成し、子供達が主体的に課題解決を進めていく探究学習になるよう、総合的な学習の時間の改善が必須である。益川教授が提唱する「本物の学び」を実現するには、各学校において、探究学習に係る研究実践を重ねていくことが求められる。

#### v 今後の展望

##### 1. 教育資源としての福井大学大学院の活用

###### 1) 「学びのネットワーク」の拡大

宮古島市教育委員会と福井大学大学院との連携協定が、締結されたことにより、宮古島の教育の振興・発展に資する教育資源(福井大学教職大学院のシステム)を活用できる好機が到来した。令和3年度にはじめて院生1名が派遣され、東京サテライト校で、他の院生とともに協働実践力や学校マネジメント力等を磨いている。現在、院生が勤務している狩俣小学校においては、総合的な学習の時間(「狩俣の文化・歴史プロジェクト」)を軸に、探求学習カリキュラム開発が行われている。院生(教頭)は、この探究学習カリキュラムの開発にむけ、互いに協働実践する教師コミュニティづくりを研究テーマに掲げ、実践研究に取り組んでいる。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け協働実践する教師コミュニティの育成が、喫緊の課題である宮古島市の現状を考えると、福島教授や木村教授の指導助言の下、狩俣小学校で推進されている研究実践は、先駆的な研究実践と言える。

来年度、福井大学大学院に入学する宮古島の教員数が増えるにしたがって拠点校の数も増える。このことは、教育資源としての福井大学教職大学院を活用し、充実した豊かな教育活動を推進する学校がさらに増えていく

ことを意味している。今後、拠点校の教員を核に宮古島の「学びのネットワーク」が広がっていくことを大いに期待したい。

## 2) 教師主導型の授業から探究の授業への転換

教師主導型の授業からなかなか脱却できない教員が多い宮古島の現状を鑑みると、主体的・対話的な深い学びの実現にむけた授業改善は、喫緊の課題である。また、久松中学校の研究実践の結果でも明らかになったように、「子供達の主体的・対話的で深い学び」の実現には、各教科における研究はもちろんのこと、子供達が探究的な学習に主体的・協働的に取り組めるよう、地区全体の総合的な学習の時間の充実を図っていくことも求められている。これらの課題を解決するためには、現在、狩俣小学校が取り組んでいる探究学習カリキュラム開発が本市の小中学校において積極的に取り組まれるよう、今後、宮古島市教育委員会の研修システムを整えていくことが望まれる。このような教師研修プログラムが、どの学校でも日常的に本市で実施されるようになれば、より多くの子供達が、探究学習を通して、学習することを「学習をやりたいと思う(外発的動機付け 総合調整)図1」として捉え、学習そのものが、『楽しいから』『興味があるから』『好きだから』(内発的調整)図1へと変容していくことが大いに期待できる。このことは、私の仮説(「小中学校段階で、学習意欲の内発的動機付けが十分におこなわれていないため、子供達の自律学習の基礎を培うことができていない状況がある。特に、中高校と校種が変わるにつれ、教師の『外発的動機づけ』がさらに強くなり、結果として、沖縄県全体で自律的に学習できる子供達をはぐくむことができていない)で論じた学力向上に係る課題解決の糸口になるのではないかと推測する。

図 1

自己決定の段階 (Ryan & Deci; 2000)						
自己決定の度合い		← 強い ← → 弱い				
動機付け	無動機付け	外発的動機付け			内発的動機付け	
自己調整 (内在化)	なし	外的調整	取り入れた調整	同一化的調整	統合的調整	
		「人から言われたから仕方なく行う」	「やらなければならぬから」	「自分にとって重要だから」	「やりたいと思うから」	「楽しいから」
学習行動の理由	「やりたいと思わない」	「やらないと叱られるから行う」	「不安だから」	「現実のために必要だから」	「自分の価値観と一致しているから行う」	「興味があるから」
			「恥をかきたくないから」			「好きだから」

## (3) 教師研修プログラムにおける教師の学びの波及

宮古島市立教育研究所では、現在、狩俣小学校で展開されている教師研修のプログラムの例を下記の「研究所だより」にまとめ発信してすることで、宮古島全体に波及することを試みている。本地区において探求学習を推進し、地区全体の教育の質を高めるためには、教育資源(福井大学大学院)を120%が活用することが肝要である。今後益々、福井大学教職大学院がもたらす教育的効果が、宮古島の教育活動の浸透し、宮古島の教育の振興・発展が促進されていくことを期待し止まない。



## b. 協働実践する教師コミュニティの創造

① 教育事務所所長 (平成30年度～令和2年度) としての取り組み

沖縄県教育委員会の出先機関として上記に述べた「学力向上対策」「キャリア教育の充実」を柱に教育行政を推進するとともに、地区全体の教職員の資質能力向上を目指し、協働研究する教師集団づくりにも努めた。

### ア 「小中連携の推進」

隣接する小中学校において、校種間連携、系統的・継続的な授業改善の推進を図っていくことを目的に、宮古管内小中連携基本計画作成・推進し、小中合同授業研究の活性化に努めた。

### イ 「地区ブロック研究会の推進」

宮古島市内を5つのブロックに分け、それぞれのブロックにおいて中学校エリア型教科研究会を足踏させ、授業改善の協働研究に取り組みさせた。年度末には研究発表会を開催することにより、各研究の成果が地区全体に広がり授業力向上につながるようにした。

### ウ 「コア型授業改善研究会の推進」

道徳教育に関心の高い小中学校の教諭を数名指名し、「議論する道徳」を目指した授業づくりについて研究を深めさせ、その成果を宮古地区全体に広めた。

## ② 教師コミュニティ形成に係る実践の省察

これまで学校長として、長年にわたって学校組織に所属し、学校経営に携わってきた中で、「授業改善を軸とした学校改革」は、主体的に協働研究に取り組む同僚性に溢れる教師コミュニティを創造することが必須であることを学んできた。そのため、教育行政に従事した3年間においても、各学校が本県の課題を踏まえ授業改善を軸に、協働研究に専念する教師コミュニティが形成されるよう、「小中合同授業研究会」、「ブロック・エリア研究会」、「コア研究会」を立ち上げ、それぞれの研究会において、研究長を中心に、研究員一人一人が主体的、協働的に実践研究に取り組めるよう、教育事務所の指導主事も積極的に関わらせ、地区全体の研究体制を整えてきた。また、研究員の実践研究の成果が、研究員以外の教師にも波及していくよう、各学期において公開授業研究会を開催するとともに、年度末には実践研究発表会を開催し、研究実践の成果を発信させた。

しかしながら、教師コミュニティの形成が教育行政主導で行われているため、「上からやらされる感」を感じながら実践に取り組んでいた研究員が多くいたことは否めない。やはり、「コミュニティ オブ プラクティス」にあるように、実践コミュニティは、自然発生的で自発的で自律的なコミュニティでなければ発展性に限りがあることを実感している。研究員一人一人が、授業改善に対して切実な思いと実践意欲に溢れ、互いに刺激し切磋琢磨していく関係性を築くことができなければ継続的・発展的な教師コミュニティの創造に結びつかない。そこで、「どうすれば、そのようなコミュニティができるのか」この問いを突き詰めていくと、「コミュニティ オブ プラクティス」に書かれてある実践コミュニティ設計の7つの原則に辿り着いた。

- 1、進化を前提とした設計を行う
- 2、内部と外部それぞれの視点を取り入れる
- 3、さまざまなレベルの参加を奨励する
- 4、公と私それぞれのコミュニティ空間を作る
- 5、価値に焦点を当てる
- 6、親近感と刺激を組み合わせる
- 7、コミュニティのリズムを生み出す

上記の7つの設計の原則（要素）を踏まえて、コミュニティの形成を図っているのが東京サテライトの院生が企画・実践している「ラウンドテーブル」である。本年度8月、宮古島において初めて「宮古島ラウンドテーブル」が開催される運びとなったが、コロナ感染拡大の影響を受け残念ながら中止となった。今回、中止となったラウンドテーブルであるが、本企画は「これからの宮古島の教師の資質能力の向上をどのように図っていくか」について、熟考する契機となった。

宮古島の教職員の約7割は、島内出身者が占めている。学校長については、ほぼ全員が島内出身である。そのため、島内の教師コミュニティは、同質の教員で形成され、離島であるがゆえ異質な人々との出会いや外部の視点、刺激を受けにくい状況にある。松木健一氏（福井大学大学院理事・副学長 2021年東京ラウンドテーブル）が提唱する『異質な人との出会いの意義』（異質性の高い人と、語りと傾聴を実現させることで、他者と共有でき根源的などころから自己の実践を再構築する）を考える機会が乏しい。

こうした状況を打破していけるのが、「宮古島ラウンドテーブル」である。これまで同質のコミュニティで生きてきた宮古島の教員が、ラウンドテーブルを通して、異質な教員と出会い、対話を通して新たな知識や価値に気付いたり、また、同じ教員として共感し教育者としての使命を深めたりすることは、宮古島の教育の発展につながっていくものと確信している。宮古島の教育を変える好機を逃がすことがないように、来年は確実に「宮古島ラウンドテーブル」を開催していきたい。

## VI おわりに

令和3年3月をもって定年退職し教職人生を一括りした折り、本職に就くことになったが、本職に就くことがなければ、私自身がこれまで主催していた教育行政期間が開催する研修会の在り方を見直すことも、宮古島の教師の成長にとって必要とされる最適な研修システムやコ

コミュニティについて、再考することもなかったであろう。また、何よりも宮古島の教育の発展に教育リソース(福井大学大学院のシステム)の素晴らしさ、価値に気づくこともなかったであろう。

これからの宮古島の教育の振興・発展、教師の資質能力の育成を考るにつけ、福井大学大学院という教育リソースの活用は必要不可欠であり、福井大学大学院との連携協定によって、宮古島にもたらされる教育効果への期待が益々高まる。

今後も、東京サテライトのCRとして、福井大学教職大学院と宮古島の架け橋になり、院生の実践研究の充実、宮古島の教育振興・発展に寄与していきたい。

【参考文献】

小倉恭彦 理科・実験指導に関する研究協議会 宮古地区 (2021)「主体的・対話的で深い学び」を目指した指導と評価

藤原幸男(2010) 琉球大学教育学部附属教育実践研究センター研究紀要 77号

益川敏英(2009) 15歳寺小屋「フラフラ」のすすめ講談社

The transformation Model

<https://pingboard.com/blog/organizational-design-101-what-to-know-before-attempting-your-own>

島袋恒夫(2019) 沖縄券の児童生徒の学習と将来の展望に関する調査」報告書

沖縄県学力向上対策(2019) 「5カ年プラン・プロジェクトⅡ」

Ryan and Edward L. Deci (2000) Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being American Psychologist, 55,68-78,

福島昌子(2021) 宮古島市立狩俣小学校教師研修プログラム資料 宮古島市立久松中学校 平成29 沖縄県教育委員会・宮古島教育委員会指定「教育課程研究」成果報告書(2019)

Wenger E.,et all.(2002)。Cultivating Communities of Practice。Harvard Business School Press. 野村恭彦監修 『コミュニティ オブ プラクティス』翔泳社2002

